

2：展覧会・イベント等事業 レポート

- 2 - 1 展覧会 LOVE♡りぼん♡FUROKU
250万乙女集合！りぼんのふろく展
- 2 - 2 展覧会 「描く！」マンガ展
～名作を生む画技に迫る——描線・コマ・キャラ～
- 2 - 3 展覧会 にっぽんアニメーションことはじめ
～「動く漫画」のパイオニアたち～展
- 2 - 4 展覧会 山岸涼子展 「光-てらす-」
-メタモルフォーゼの世界-
- 2 - 5 展覧会 クッキングパパ展 旅する。食べる。料理する。
- 2 - 6 展覧会 〈ケベック・バンド・デシネ〉知っていますか？
25の足跡と7人の作家から
- 2 - 7 展覧会 竹宮恵子監修 原画'(ダッシュ)展示シリーズ
幻想と日常の間～西谷祥子・おおやちき・波津彬子～
- 2 - 8 イベント トークイベント
江口寿史流5分スケッチの極意
- 2 - 9 イベント ゼイナ・アピラシエド×ヤマザキマリ対談
～オリエンタリズムとオクシデンタリズムを超えて
：マンガの想像力～
- 2 - 10 コレクション 原画'(ダッシュ)の制作と活用
- 2 - 11 コレクション 江戸戯画・明治戯画・戯画本コレクション
の活用
- 2 - 12 コレクション 村上知彦コレクション整理事業
- 2 - 13 その他 海外での事業展開

2-1 : LOVE ♡りぼん♡ FUROKU

250万乙女集合！りぼんのふろく展



期間：2016年12月8日（木）～ 2017年2月5日（日）

開催日数：46日間

会場：京都国際マンガミュージアム 2階 ギャラリー1・2・3

主催：京都精華大学国際マンガ研究センター / 京都国際マンガミュージアム

協力：集英社 / 明治大学 米沢嘉博記念図書館 / 弥生美術館

担当研究員：倉持佳代子

実施概要

1955年に創刊し、1994年に少女マンガ誌史上最高発行部数255万部を達成し、今なお少女読者に愛されている『りぼん』のふろくに注目した展覧会。りぼんの黎明期から現在までのふろく文化の変遷を追うことで、時代ごとの少女像、雑誌を取り巻く出版事情、マンガ家と編集者、デザイナーや印刷所など作り手の姿も浮かび上がってきた。出展資料の多くは京都国際マンガミュージアムに寄贈されたふろく資料で初活用された。組み立て状態で展示している点でも画期的だった。

展示内容は平成28年度「メディア芸術連携促進事業」連携・協力の推進に関する調査研究「超」領域展覧会の企画立案：「少女マンガ誌・およびふろくにまつわるオーラルヒストリー」で得た知見を参考にしている。同プロジェクトで実施した1980年代から現在の『りぼん』を支えた編集者へのインタビューは、「メディア芸術カレントコンテンツ」(<http://mediag.bunka.go.jp>)にて公開され、貴重な記録となっている。本展は東京、秋田にも巡回され好評を博した。

（文責：倉持佳代子）

展示内容

- 『りぼん』のふろくおよそ 2,000 点
池野恋、水沢めぐみ、柘あおい、吉住渉、さくらももこ、
矢沢あい、高須賀由枝のふろくの原画約 35 点

展示構成

- ◆ごあいさつ
- ◆戦前～60年代～ふろく前史と『りぼん』黎明期
- ◆70年代～乙女ちっくまんがとふろく
- ◆80年代～ナンバーワン少女マンガ誌へ
- ◆90年代～史上最高発行部数 255 万部を達成！
- ◆ゼロ年代へ～紙ものからモノ・ふろくへ
- ◆現在の少女達が大好きなふろくへ
- ◆コラム
- ◇いつだってふろくがそばにあった！
(90年代の女の子の学習机)
- ◇戦前から90年代まで
～ふろくを取り巻く環境の移り変わり
- ◇紙ものふろくはいかにしてできたのか？
- ◇ふろくの原画
- ◇ふろくの解説
(別冊ふろく / 8月の定番トランプ / りぼん手帳 / 思い出セット / おひなさま / お正月セット / レターセット / 組み立てふろく / まんが家セット)
- ◇爆発的なギャグマンガ
- ◇ふろくファンルーム
- ◇応募者全員大サービス
マンガミュージアム版ふろくファンルーム

関連イベント

- 担当研究員によるギャラリートーク
：2016年12月8日(木) 11:30 / 14:30
各回約30名
- 柘あおいトークイベント&サイン会
：2016年12月17日(土) 14:00～17:00
参加者：200名(サイン会50名)
- 高須賀由枝トークイベント&サイン会
：2017年1月22日(日) 14:00～17:00
参加者：200名(サイン会50名)
- えむえむワークショップ「レターセットをつくろう！」
：2016年12月10日(土)～2017年2月5日(日)

巡回

- ▲明治大学 米沢嘉博記念図書館
：2017年2月18日(土)～6月4日(日)
- ▲横浜市増田まんが美術館・特設展示会場「くらを」
：2017年7月29日(土)～10月29日(日)



展覧会 exhibition

2-2：『描く!』マンガ展

～ 名作を生む画技に迫る ―― 描線・コマ・キャラ ～

2 展覧会・イベント等事業レポート



期間：2017年3月16日（木）～4月14日（火）[前期] / 4月14日（金）～5月14日（日）

開催日数：24日間 [前期] / 28日間 [後期]

会場：京都国際マンガミュージアム 2階 ギャラリー1・2・3 + 1階 吹抜け

主催：京都国際マンガミュージアム / 京都精華大学国際マンガ研究センター

監修：伊藤剛

監修アシスタント：三輪健太郎

企画協賛：東京工芸大学マンガ学科 / 京都精華大学 / 株式会社セルシス / 株式会社ワコム
/ デリーター株式会社 / コミ Po!

企画協力：アートプランニングレイ / 手塚プロダクション

特別協力：大阪府立中央図書館 国際児童文学館 / NPO 法人 熊本マンガミュージアムプロジェクト
/ 株式会社 ボークス / 講談社 / 集英社 / 小学館 / 少年画報社 / スクウェア・エニックス
/ GG7 / ムービック / 有限会社トランクライザープロダクト / よつばスタジオ / リイド社
/ pixiv

担当研究員：伊藤遊



実施概要

日本のマンガ文化の特徴のひとつは、マンガを〈描く読者〉が数多く存在していることである。本展では、戦後、プロのマンガ家ではない素人のマンガ読者たちが、いかにたくさんマンガを描いてきたかに注目し、そうした人たちにマンガを描くことを促している、各時代の様々な文化装置——投稿マンガ誌としての『漫画少年』や『COM』、同人誌即売会「コミックマーケット」やイラスト・マンガ投稿サイト「pixiv」など——を、同時代の史資料で紹介した。

そして、〈描く読者〉を生み出していくこうした文化装置の解説を背景に、プロになっていった13人のマンガ原画（一部複製、デジタルプリント）約300点を展示。戦後の各時代を代表するマンガ家たちの作品を並べることで、マンガ表現、特に描線というものに、

時代のトレンドと作家の個性があることを知ってもらうのも、本展の目的のひとつだった。ところで、このように、作品が生み出された文化的な背景を歴史的な流れとして描いた上で、表現の変遷をたどるといって、一般的な美術展では当たり前のやり方で作られたマンガの展覧会というのは、実は、それまでほとんどなかった。企画を立ち上げた大分県立美術館の学芸員を中心に、複数のマンガ研究者による監修・キュレーションチームを作って、コンセプトから作り上げていくというやり方も、マンガ展の作り方としては異例だが、その意味で、公立の美術館・博物館やマンガ関連文化施設におけるマンガ展のひとつのあり方をも提示できた展覧会だったのではないだろうか。

（文責：伊藤遊）

展示内容

- 13作家のマンガ原画（一部複製）約300点（前期後期の総数）
出展作家：手塚治虫、石ノ森章太郎、藤子不二雄[Ⓐ]、赤塚不二夫、水野英子、さいとう・たかを、竹宮恵子、陸奥A子、諸星大二郎、島本和彦、平野耕太、あずまきよひこ、PEACH-PIT

- 「描く」人たちが産んできた日本のマンガ文化環境を示す史資料とその解説パネル
- マンガ家・田中圭一が上記出展作家（8作家）のマンガ表現を分析したパネル

関連イベント

- トークイベント「田中圭一 × 伊藤剛対談 描いて読み解く！」
日時：2017年3月18日（土）14:00～16:00
会場：京都国際マンガミュージアム 1階 多目的映像ホール
出演者：田中圭一（マンガ家）/ 伊藤剛（東京工芸大学教授）
- トークイベント「田中圭一 × 吉田戦車対談 『描く！』ギャグマンガ家」
日時：2017年5月3日（水）14:00～16:00
出演者：田中圭一（マンガ家）/ 吉田戦車（マンガ家）
- シンポジウム「京都精華大学 × 東京工芸大学マンガ学科 『描く！』ことの未来 —マンガ、キャラ、ネットワーク—」
日時：2017年5月4日（木）14:00～16:00
出演者：田中圭一（京都精華大学教授）/ 伊藤剛（東京工芸大学教授）
- ワークショップ「ぶちマンガ家体験 ～『描く！』マンガ展 ver.～」
日時：2017年3月11日（土）～5月14日（日）土・日・祝 11:30～12:30 / 14:00～15:00

展覧会 exhibition

2-3： にっぽんアニメーションことはじめ ～「動く漫画」のパイオニアたち～展



期日：2017年4月6日（木）～7月2日（日）

開催日数：74日

会場：京都国際マンガミュージアム 2階 ギャラリー4

主催：京都国際マンガミュージアム / 京都精華大学国際マンガ研究センター /
Animation As Communication

共催：おもちゃ映画ミュージアム

協力：川崎市市民ミュージアム / 東京国立近代美術館フィルムセンター
/ 大阪府立中央図書館 国際児童文学館 / 和歌山県立近代美術館
/ 音楽学校メーザー・ハウス

映像提供：松本夏樹 / 日本アニメーション文化財団 / 安田彪

原版協力：東京国立近代美術館フィルムセンター

アートディレクター：新美ぬゑ

担当研究員：應矢泰紀

実施概要

1917年、国産初のアニメーションが浅草公園六区の映画館で封切られてから2017年で100年の節目にあたる。これを記念し、クリエイティブユニット Animation As Communication（森下豊美、高田苑実、新美ぬゑ）が当時の制作事情を振り返る企画を考え、当館と共同で展示・上映を行った。

展示では当時アニメーション制作に挑んだ先駆者である、下川凹天、幸内純一、前川千帆、北山清太郎の4人を取り上げ、戦前の漫画文化と、アニメーション文化の交わりが分かる関連資料を時系列で紹介した。

上映では国産で現存する最古のアニメーション「なまくら刀」や、既存せず、手記などの記録から作成した再現アニメーションのほか、当初の制作方法の解説映像、トリビュート作品、おもちゃ映画などの上映を行った。完成された海外からの作品から作成方法を推測し、手間ひまをかけ作り出した先駆者達。黒板への描き消しの繰り返しでアニメーションを作成していた下川凹天はその後、自作のトレース機器で作品を作成するが、その光量から目を痛め、アニメーションの作成を断念する。そんな彼らの努力から、今現在日本の作成が世界中で愛されるアニメーションにまで発展したと考えると、感慨深いものがある。総展示数は、約170点の展示・上映を行っている。

この他にも関連イベントとして、1917年6月30日現存最古の国産アニメーション「塙凹内新刀の巻」、通称「なまくら刀」が幸内純一らの手によって作成され、劇場公開された日である事を記念し、100周年目にあたる日に合わせ、上映と講演会との、二部構成で『なまくら刀』公開100周年記念祭を開催した。

第一部は活動写真弁士とサイレント映画伴奏者による生演奏付き活弁上映会を行った。特に「なまくら刀」の上映にはフィルムの手回

し映写機による投影を行い、当時をできる限り再現した。他にも現存しない下川凹天の第一作作品の元となったと考えられる「芋川椋三・イノシシ狩り」の再現アニメーションや、断片のみ現存する北山清太郎の「太郎の兵隊潜航艇の巻」を、絵物語から再現したアニメーション、そしておもちゃ映画ミュージアムのコレクションを使用した戦前期アニメーションを豪華につめあわせた「おもちゃ映画 de 玉手箱」の上映会を活弁伴奏付きで行った。この度の上演には手回しの映写機の準備と操作を松本夏樹氏に行っていただいた。松本氏は「映写技師と弁士は阿吽の呼吸で行われているが、仲が悪いと互いが主張しだす」のだという。

幕間上映として現代作家による下川凹天トリビュートアニメーション集の上映を行い、第二部からはトークイベントとして「渡辺泰 国産アニメーション100年を語る」と題し、アニメーション史研究の第一人者の渡辺泰氏を招いて、当時の状況、特に「なまくら刀」において、幸内純一と前川千帆の役割の可能性、作成の工程などについて解説が行われた。なかでもどのように作成されているかの証拠とも言える場面を紹介していただいた。（待の口あたりの部品が、劇中の1フレームだけ宙に浮いている。動画撮影中の取り外しミスと思われる）この事により、細かなパーツを数多くの入れ替えで作成されているか当時の作成がどのくらい苦労かが理解できるイベントとなった。

他にも Animation As Communication の森下豊美、高田苑実による小学生を対象としたコマ撮りアニメーションのワークショップを開催した。

（文責：應矢泰紀）

展示構成

- ◆ 下川凹天による現存しない国産初のアニメーションを現代の作家たちの感性で蘇らせたトリビュート作品上映
- ◆ ディズニーなど海外のアニメーションが国内の作家たちへ与えた影響など、戦前期の漫画とアニメーションの関わりに関する資料の展示
- ◆ 知られざる戦前期のアニメーション映像の展示（おもちゃ映画ミュージアム所蔵）
- ◆ 雑誌『東京パック』『少女画報』『楽楽パック』『漫画』など
- ◆ 単行本「お伽正チャンの冒険」「のらくろ上等兵」「タンク・タンクロー」など
- ◆ 展示総数約 170 点（雑誌・書籍資料：約 90 点 映像資料：10 点 その他複写・写真資料：約 70 点）



2-4：山岸凉子展

「光 - てらす -」 - メタモルフォーゼの世界 -



期間：2017年5月27日（土）～9月3日（日）

開催日数：87日間

会場：京都国際マンガミュージアム 2階 ギャラリー1・2・3

主催：京都精華大学国際マンガ研究センター / 京都国際マンガミュージアム

特別協力：株式会社上ノ空

協力：弥生美術館

担当研究員：倉持佳代子

実施概要

1969年にデビューし、「アラバスク」「日出処の天子」などのヒット作を生み出し、巧みな心理描写と画面構成で読者を魅了し続けるマンガ家・山岸凉子の原画展。東京・弥生美術館で2016年に開催した展覧会の巡回だが、当館では「日出処の天子」の原画34点が追加出展された。総数は新規出展も含め、初期作から最新作までの原画243点である。掲載雑誌、関連グッズ資料も含めるとおよそ

300点となり、これだけ大規模な氏の個展は関西初だ。

多作な山岸作品を並べ見ることで、氏がいかに少女マンガの先駆者であるか、根源的な人間ドラマの追求者であるかに気付く。拘り抜いて描かれた線の細さ、色の妙に来館者は圧倒され、原画展の意義を深めてくれた。

（文責：倉持佳代子）

展示内容

- カラー原画の劣化を防ぐため、会期を「前期中期後期」に分けて入替前期と後期は同じ原画を出展。
展示構成は弥生美術館での展示をベースに当館でアレンジを加えた。

展示構成

- ◆ 漫画家デビューと初期作品
「ひまわり咲いた」「ラグリマ」「雨とコスモス」など
- ◆ 大ヒット作「アラベスク」の誕生
- ◆ 「アラベスク 第二部」の連載
- ◆ 短編・口絵 名作選 1973～1979
「メタモルフォシス伝」「妖精王」「ひいなの埋葬」「天人唐草」など
- ◆ 『LaLa』の創刊（前期・後期）/ 日本美術に傾倒（中期）
- ◆ 代表作「日出処の天子」誕生
- ◆ 『ASUKA』での仕事
- ◆ -山岸涼子ベストセレクションコーナー
- ◆ モノクロームの美しさ
- ◆ 短編名作選 1981～1998
「ヤマトタケル」「封印」など様々な作品
「パイド・パイパー」「鬼」「白眼子」など
- ◆ エッセイマンガ
- ◆ 女性を描く
- ◆ 『テレシコーラ-舞姫-』
- ◆ 2000年代の作品
「ケセラン・バサラン」「レベレーション-啓示-」など

関連イベント

- ギャラリートーク：2017年5月27日（土）11:00 / 14:30
- 荒俣館長が語る！山岸涼子の世界：2017年5月28日（日）14:00～15:00



2-5：クッキングパパ展 旅する。食べる。料理する。



写真：西村祐一

期間：2017年9月16日（土）～11月19日（日）[第1期] /
11月23日（木）～2018年1月14日（日）[第2期]

開催日数：15日間 [第1期]、41日間 [第2期]

会場：京都国際マンガミュージアム 2階 ギャラリー1・2・3

主催：京都精華大学国際マンガ研究センター / 京都国際マンガミュージアム
/ 東アジア文化都市 2017 京都実行委員会 [第1期] / 京都市 [第1期]

※第1期は「東アジア文化都市 2017 京都」事業の一環として開催。

9月16日、17日は「京都国際マンガ・アニメフェア 2017」の関連イベントとして実施。

協力：うえやまプロ / (株) 講談社

グラフィックデザイン：西村祐一

担当研究員：伊藤遊



写真：西村祐一

実施概要

1985年の連載開始以来、30年以上にわたって描き続けられている人気〈食マンガ〉「クッキングパパ」を、その原画（原稿）を中心に紹介する展覧会。

この作品は、作者であるうえやまとち自身が自宅兼仕事場の厨房で料理を作り、それを元にストーリーを考えていく、という特殊な過程で作られている。毎話、マンガの中に登場する料理が実際に作れるレシピが掲載されているのが特徴で、読者には、マンガのストーリーだけでなく、そのレシピをみて自分で調理する楽しみも用意されている。本展では、本作が持つこうした構造に注目、展覧会というものを、現実世界とマンガ世界とが相互に作用するための装置として機能するものとして構成した。

第1部では、同展のために実施された中国・長沙および韓国・大邱広域市における作者自

身の取材調査を踏まえて描かれたエピソードの原画が展示された。展覧会の開催が契機となって、連載中のマンガ作品のための大規模な調査（長沙1回、大邱2回）が実施され、新作エピソードが数回にわたって作られるということは、これまでなかっただろう。

京都国際マンガミュージアムでは、2008年より毎年、「クッキングパパ」に登場する料理を作者自身が調理して参加者と一緒に食べるという、音と香りと味をトークとともに楽しむイベントを開催してきた。本年度も、展覧会開催に合わせ、10回目が実施されたが、第2部では、過去9回分のイベントで作った料理が登場するエピソードの原画を、イベントの動画とともに[第1期]紹介した。

（文責：伊藤遊）

展示構成

◆イントロダクション

「クッキングパパ」が1985年に『モーニング』誌（講談社）で連載が開始されるまでの、うえやま氏による仕事を紹介した上で、同作の第1回目（「COOK.1」）の原稿を展示。

◆第1部 中国・長沙 / 韓国・大邱広域市編

- 〈空間〉を超える

「東アジア文化都市 2017 京都」事業の一環として訪れた中国・長沙市、韓国・大邱広域市での作者の取材の様子と、その取材を経て描かれた「クッキングパパ」の「We love 大邱編」の原画を紹介。また、マンガ家のフィールドワークがどのように作品として昇華されているのかを解説。

◆カラー原画コーナー

◆第2部 マンガクッキング編 - 〈時間〉を超える

京都国際マンガミュージアムで毎年開催されているイベント「マンガクッキング」（2008年 - ）過去9回で紹介した9つのエピソードの原画を、テーマ別に展示。

◆コラム

- 1) 〈ご当地マンガ〉としての「クッキングパパ」
- 2) 「クッキングパパ」における中国と韓国
過去の同作に登場した142の中国（風）・韓国（風）料理のレシピページをすべて展示。

3) 「クッキングパパ」ができるまで

同作ができあがっていく過程を「大邱編」を例に解説。

4) 「クッキングパパ」キャラクター大集合 [第2期]

単行本1～100巻に登場するキャラクター約350人のコマをパネル化し、登場順に展示。

◆3人の〈食マンガ家〉による「From 読者 to パパ」

雑誌の読者投稿欄を模した形で、ビッグ錠、倉田よしみ、土山しげる3氏の書き下ろしコメントを展示。

◆「クッキングパパ展 旅する。食べる。料理する。」関連特集棚「〈食マンガ〉大百科」

※マンガミュージアム1階吹き抜けて開催。

マンガミュージアムが所蔵している「食」に関するマンガ本400作品以上を集め展示。

手に取って読めるようにした。

関連イベント

■トークイベント「作者うえやまとちとアシスタントが語る「クッキングパパ」の舞台裏」

日時：2017年9月16日（土）13:00～15:00

会場：京都国際マンガミュージアム 1階

多目的映像ホール

■調理+トークイベント「うえやまのちのマンガクッキング10杯目」

日時：2017年11月12日（日）14:00～16:00

会場：京都国際マンガミュージアム 1階

多目的映像ホール



写真（上から4番目）：西村祐一

出展一覧

資料形態	作品名	掲載誌名	ページ数	制作年 / 発表年	コメント	原画 点数	書籍 資料 点数
イントロダクション							
原画 (カラーイラスト)	渡さんの予定表 【第1期】			1979年		1	
原画 (イラスト)	無題【第2期】			1975年頃	デザイン会社に勤めていた頃に描かれたイラストカットや、当時の習作		
原画 (マンガ)	かかしとスズメ			1970年頃		4	
原画 (マンガ)	デコイチのロケット			1970年頃		4	
原画 (マンガ)	コントピア 男たち		22、23、25、26 (原稿に記された ページ数)	1983年頃		4	
原画 (冊子形態の マンガネーム)	はるきくんの日記		22、23、25、26	1979年		3	
掲載誌	つぶらな瞳 (上山とち名義)	『ビッグコミック スピリッツ』 1981年6月号、 小学館		1981年			1
掲載誌	アルフォード (Tochi名義)	『別冊ビッグコ ミック ゴルゴ 13シリーズ』47、 小学館	pp.246-247	1981年			1
掲載誌	ぶっ飛び広海くん	『ジャストコミッ ク』1985年3月 号、光文社	pp.4-5	1985年			1
掲載誌	ぶっ飛び広海くん	『ジャストコミッ ク』1985年9月 号、光文社	pp.98-99	1985年	田中を叱る荒岩、ではない。		1
掲載誌	大字・字ばさら駐在所	『ジャストコミッ ク』1982年7月 号、光文社、 1982年		1982年	荒岩の“原点”のひとりである「源さん」が見える。		1
掲載誌	大字・字ばさら駐在所	『ジャストコミッ ク』1984年11 月号、光文社、 1984年	pp.206-207	1984年	連載終盤には「とちくんの料理教室」と銘打たれたレシピシリーズが載るように。		1
掲載誌	ガッツベンけい (牛次郎・原作、上山 とちひこ名義)	『週刊少年チャン ピオン』1980年 10号、秋田書店、 1980年	pp.146-147	1980年			1
参考書籍資料	第14回手塚賞発表	『週刊少年ジャン プ』1978年1号、 集英社、1977年	pp.88-89	1977年	上山敏彦名義で投稿した「くだらない勇気」が佳作入選。		1
掲載誌	かかしとスズメ	『COMIC ぱく』 1984年秋季号、 日本文芸社、 1984年	pp.164-165	1984年	短大時代に描かれた作品のリライト。		1
原画 (マンガ)	かかしとスズメ	クッキングパパ (ちばてつや賞投 稿版)	1 (表紙)、7、8、 9、10、11、13、 15、16、17、18、 19、20、21、22、 23、24、25、26	1984年		19	1
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.1)		表紙、4、5、6、 7、8、9、10、 11、12	1984年	短大時代に描かれた作品のリライト。		1

資料形態	作品名	掲載誌名	ページ数	制作年 / 発表年	コメント	原画 点数	書籍 資料 点数
第1部							
第1期							
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.1417)		表紙、2、3、4、 5、6、7、12、13、 14、15、16、17、 18	2017年		14	
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.1420)		表紙、2、3、4、 5、6、9、10、11、 12、13、14、15、 16	2017年		14	
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.1421)		表紙、4、5、6、 7、8、9、10、 11、12、13、14、 15、16、17、18	2017年		16	
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.1422)		表紙、2、3、4、 5、7、8、9、10 -11 (見開き)、 12、13、14、15、 16、17	2017年		16	
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.1423)		表紙、2、3、4、 5、6、7、8、9、 10、12、13、14、 15、16、17、18	2017年		17	
第2期							
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.1429)		1、2、3、4、5、 6、7、12、13、 14、15、16、17、 18	2017年	11月12日に当館で開催されたイベント「マ ンガクッキング10杯目」で、この回に登場す る「ナスのピリ辛蒸し」が、作者自身によっ て作られた。	14	
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.1432)		2、3、4、5、6、 7、8、16、17、 18+11、13	2017年		12	
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.1433)		1、2、3、4、5、 6、7、10、11、 12、13、14、15、 16、17、18	2017年	11月12日に当館で開催されたイベント「マ ンガクッキング10杯目」で、この回に登場す る「長沙風酸菜炒飯」が、作者自身によって 作られた。	16	
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.1420)		表紙、2、3、4、 5、6、9、10、11、 12、13、14、15、 16	2017年	11月12日に当館で開催されたイベント「マ ンガクッキング10杯目」で、この回に登場す る「花餅」が、作者自身によって作られた。	再展示	
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.1422)		表紙、2、3、4、 5、7、8、9、10 -11 (見開き)、 12、13、14、15、 16、17	2017年		再展示	
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.1423)		表紙、2、3、4、 5、6、7、8、9、 10、12、13、14、 15、16、17、18	2017年		再展示	
カラー原画コーナー							
第1期							
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ			不明		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ 『クッキングパパ』 49巻表紙)			1997年		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ (『週 刊モーニング』1993 年12月2日号表紙)			1993年		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ (COOK.283)			1991年		1	

資料形態	作品名	掲載誌名	ページ数	制作年 / 発表年	コメント	原画 点数	書籍 資料 点数
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ (['クッキングパパ'] 80巻表紙)			2005年		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ			不明		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ			不明		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ			不明		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ (['クッキングパパ'] 14巻表紙)			1989年		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ (『料 理ンピック』用イラ スト)			不明		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ (['クッキングパパ'] 18巻表紙)			1990年		1	
第2期							
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ (COOK.204)			1990年		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ (['モーニング』表紙)			不明		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ (['クッキングパパ'] 64巻表紙)			2001年		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ (『週 刊モーニング』1992 年7月23日号表紙)			1992年		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ (['クッキングパパ'] 73巻表紙)			2003年		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ			不明		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ (['クッキングパパ'] 43巻表紙)			1996年		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ (カ レンダー用イラスト)			不明		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ (COOK.702)			2001年		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ			不明		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ			不明		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ (『週 刊モーニング』1992 年1月9日号表紙)			1992年		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ (['クッキングパパ'] 100巻表紙)			2008年		1	
原画 (カラーイラスト)	クッキングパパ			不明		1	

資料形態	作品名	掲載誌名	ページ数	制作年/ 発表年	コメント	原画 点数	書籍 資料 点数
第2部							
第1回マンガクッキング							
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.1)		11、12、13、 14、15、16	1985年		6	
原画 (マンガ)	クッキングパパ 『モーニング』2015 年22・23合併号表 紙=『クッキングパ パ』136巻表紙 [第1期]			2015年	COOK.1と対になるエピソードが後に描かれ た(COOK.1327)が、その話が収録された単 行本136巻の表紙も、単行本1巻と対応して いる。	2	
第2回マンガクッキング							
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.42)		3、4、5、6、 7、11、12、 13、14、15 (原 稿に記された ページ数)	1985年		10	
第3回マンガクッキング							
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.8)		1 (2色)、5、 6、7、8、9、 13、14、15	1985年	荒岩の鈍足が判明するが、「9 スポーツ」コー ナーで展示している「COOK.1298」で克服さ れていることがわかります。	9	
第4回マンガクッキング (テーマ: ダイエット)							
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.1035)		2、3、4、5、 8、9、14、 15、17	2008年		9	
第5回マンガクッキング (テーマ: 婚活)							
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.354)		1 (カラー)、 10、11、12、 13、14、15、 16-17 (見開 き)、18、19、 20	1993年	「クッキングパパ」の準主役と言ってもいい、 荒岩の部下・田中が夢中にプロポーズする最 重要エピソードのひとつ。	12	
第6回マンガクッキング (テーマ: 博多)							
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.188)		1、10、11、 12、14、15、 16、17、 18※13は複製 を展示	1989年		9	
第7回マンガクッキング (テーマ: パパ)							
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.1269)		1、4、5、6、 7、8、12、 14、16、17、 18、19、20	2013年	作者自身が作品世界に登場する珍しい回。	13	
第8回マンガクッキング (テーマ: 朝ごはん)							
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.213) [第1 期]		1 (カラー)、 2 (カラー)、 6、7、8、9、 12、13、14、 15、16	1990年	「クッキングパパ」のオリジナル料理の中で最 も知られた「おにぎらず」が登場。	11	
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.390) [第2 期]		7、8、9、10、 11、12、13、 14、15、16、 18	1994年		11	
第9回マンガクッキング (テーマ: スポーツ)							
原画 (マンガ)	クッキングパパ (COOK.1298)		1、9、13、 14、15、16、 17、18、19、 20	2014年	「力はあるがスピードは無い」と解説されてい た「荒岩走り」(COOK.8)が克服されている。 こういうところでも時間の経過を感じさせる。	10	
出展資料数						292	9

展覧会 exhibition

2-6 : 〈ケベック・バンド・デシネ〉を知っていますか？

——25の足跡と7人の作家から



写真：浅野豪

期間：2017年12月9日（土）～2018年2月20日（火）

開催日数：48日間

会場：京都国際マンガミュージアム 2階 ギャラリー4

主催：京都国際マンガミュージアム / 京都精華大学国際マンガ研究センター / 京都府
/ ケベック州政府

協賛：ケベック市

特別協力：ケベック・フランコフォン・バンド・デシネ・フェスティバル

展示プロデュース：榊原充大（RAD）

空間デザイン：浅井ゆき（TANK）

グラフィックデザイン：仲村健太郎

担当研究員：伊藤遊



写真：浅野豪

実施概要

カナダ・ケベック州で作られてきたフランス語圏のマンガ [=バンド・デジネ = BD] に焦点を当てた展覧会。いくつかの作品が日本語翻訳されているものの、全貌が日本ではほとんど知られていなかったケベック発のバンド・デジネを、その歴史および現在活躍中の同州出身作家7人の作品（複製原画）で紹介した。

25のトピックで、1792年から2011年までの〈ケベック・バンド・デジネ〉の流れを描いた年表は、2016年にベルギーのバンド・デジネ・フェスティバルのために作成され、キューバ、そしてケベック

クを巡回した展示をベースにしている。年表に関しては、それまで平面パネルに提示されていた情報を、ハンズオンの大型巻物式仕器に移し替えることで、来場者がアクセスしやすくなるインターフェイスであることを目指した。

7人の作家と、展示作品に関しては、同展のために、新たに選ばれたもの。作風だけでなく、原稿サイズなども7人7様で、そのバラエティの幅広さが、ケベックのコミックス事情を象徴している。

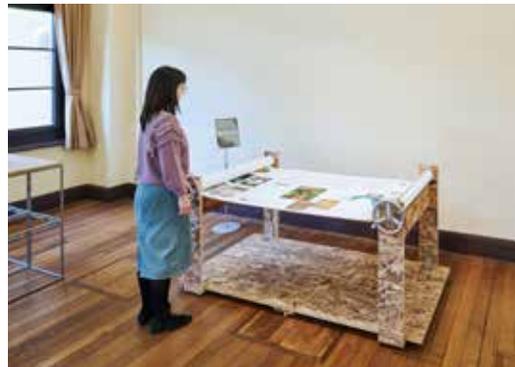
（文責：伊藤遊）

展示内容

- ・〈ケベック・バンド・デジネ〉の発展を25の足跡からたどる歴史年表、および雑誌・ポスターなどの関連資料
- ・ケベック州出身作家7人の複製原画作品（各5点）
出展作家：キャブ（Cab）/ エスベ（Esbé）/ ミシェル・ファラルド（Michel Falardeau）/ パスカル・ジラルール（Pascal Girard）/ フィリップ・ジラルール（Philippe Girard）/ レアル・ゴドゥブ（Real Godbout）/ ズヴィアンヌ（Zviane）

関連イベント

- ギャラリートーク+ライブ・ドローイング
日時：2017年12月9日（土）11：00～[ギャラリートーク]/14：00～16：00 [ライブ・ドローイング]
会場：京都国際マンガミュージアム 1階 ワークショップコーナー
出演：トマルイ・コテ（ケベック・フランコフォン・バンド・デジネ・フェスティバルジェネラルマネージャー）
[ギャラリートーク]/ズヴィアンヌ（バンド・デジネ作家）[ライブ・ドローイング]
- ワークショップ「ケベック BD 作家・ズヴィアンヌと音楽を聞いてキャラクターを作ろう！」
日時：2017年12月17日（日）13：00～15：00
会場：京都国際マンガミュージアム 1階 ワークショップコーナー
出演：ズヴィアンヌ（バンド・デジネ作家）
- ワークショップ「ケベック BD 作家・レアル・ゴドゥブと一緒に作品を作ろう！」
日時：2018年2月4日（日）13：30～15：30
会場：京都国際マンガミュージアム 1階 ワークショップコーナー
出演：レアル・ゴドゥブ（バンド・デジネ作家）
- ライブ・ドローイング「ライブ・ドローイング：フィリップ・ジラルール」
日時：2018年2月11日（日）13：30～15：30
会場：京都国際マンガミュージアム 1階 ワークショップコーナー
出演：フィリップ・ジラルール（バンド・デジネ作家）



写真：浅野豪

2-7：竹宮恵子監修 原画'(ダッシュ) 展示シリーズ 幻想と日常の間～西谷祥子・おおやちき・波津彬子～



期間：2018年2月1日(木)～5月27日(日)(116日間)

会場：京都国際マンガミュージアム 2階 ギャラリー1・2

主催：京都精華大学国際マンガ研究センター / 京都国際マンガミュージアム

協力：トランクライザープロダクト

担当研究員：ユー・スギョン / 倉持佳代子

実施概要

恒例である精巧な複製原画のプロジェクト・原画'(ダッシュ)の新作を発表する展覧会。本プロジェクトでは、マンガ家で京都精華大学の教授である竹宮恵子の監修の下、退色等劣化しやすいデリケートなマンガ原稿の保存と公開を両立させるべく、精巧な複製原画を研究・制作している。

2017年度の展覧会では、西谷祥子・おおやちき・波津彬子3名の原画を元に新しく制作した原画'(ダッシュ)と、プロジェクトリーダーである竹宮恵子の原画'(ダッシュ)を紹介した。今回の展覧会の中心人物となった西谷祥子・おおや

ちき・波津彬子は、デビューした時期や作品の傾向などは異なるものの、いずれも女性向けマンガの歴史を語る上では欠かせない人物である。特に1980年代後半以来、ほとんどマンガを発表していない西谷祥子や、70年代末にイラストレーターに転向したおおやちきの作品が紹介されることは極めて少ないため、貴重な機会となった。また、波津彬子の原画'(ダッシュ)は、本展覧会に先立って2015年にイギリスのケンダル、サウスポート、ロンドンでの展覧会でも公開されており、原画'(ダッシュ)としては初めて国内に先駆け、海外で公開された事例となった。

(文責：ユー・スギョン)

関連イベント

■トークイベント「波津彬子、イギリスに行く」

日時：2018年5月20日（日）13:00～14:00

会場：京都国際マンガミュージアム 1階 多目的映像ホール

原画（ダッシュ）展示シリーズ「幻想と日常の間」展の出展作家の一人である波津彬子氏を招き、ご自身の初めてのイギリス旅行について語っていただいた。

2015年に原画（ダッシュ）プロジェクトでイギリスに招待され、訪問にまで至った経緯や、The Lakes International Comic Art Festivalでの展覧会、大英博物館でのトークショーイベントなど、現地での思い出について話を聞くことができた。また、『うるわしの英国シリーズ』など、波津氏のマンガにイギリスが舞台にした作品が多い理由や、他国を舞台にしたマンガを描く時の楽しさについても知る機会になった。

■トークイベント「『JUNE』からやおいまで」

日時：2018年5月20日（日）14:15～16:00

会場：京都国際マンガミュージアム 1階 多目的映像ホール

出展作家の波津彬子と雑誌『JUNE（ジュネ）』元編集長の佐川俊彦、そして本プロジェクトの監修者である竹宮恵子によるトークショー。

いまや一つのジャンルとして数多くのファンを魅了しているボーイズラブだが、ボーイズラブや「やおい」がジャンルとして確立する前の話を創作者や編集者等の視点をそれぞれ交えながら、当時の状況について語っていただいた。

男性同士の恋愛を描いたマンガのジャンル名としても使われることのある「やおい」という言葉の誕生秘話や本当の意味、また『JUNE』の出版にまつわる話など、これまであまり知られていなかったことについて、詳細に話を聞くことができた。



イベント event

2-8：トークイベント

江口寿史流 5分スケッチの極意



開催日時：2016年8月17日(日) 14:00～15:30

会場：京都国際マンガミュージアム 1階 多目的映像ホール

出演者：江口寿史(マンガ家)

参加者数：200名

主催：京都国際マンガミュージアム / 京都精華大学国際マンガ研究センター

担当研究員：應矢泰紀

イベント概要

「江口寿史展 KING OF POP 京都編」の関連イベントとして企画された本イベントは、江口寿史氏に、自身のツイッターで話題となった「5分スケッチ」を中心に、人物の魅力ある描き方について語っていただいた。「5分スケッチ」は、クロッキーやデッサンとは目的が異なり、下描きなしでいかに現実の人物などを自分の描画スタイルに描き起こしていくかの訓練方法である。よって似顔絵のように似せて描くのが目的ではない。「5分」は本人自身が戒めを込めて定めた時間で実際にこの時間内に完成するのは難しいが、年々このスケッチからテクニックが開発され、素早く描けるようになったという。

ポイントはいかに少ない線に取捨選択して描くのかということだそう。輪郭線とは異なる凹凸によって作り出されるシワについては、写実の精密性・線の密度が増えてくると親和性も上昇するが、ある程度人に近づいた時点で突然嫌悪感に転化するいわゆる「不気味の谷」を回避することにもつながる。しかし江口氏は「鼻の穴」を躊躇いなく描く。本

来省略したり、陰などでごまかし気味なところだが、江口氏はむしろ人間らしさを損なわない個性として、きちんと描くのだという。凛々しくも血が通う生きた人間らしさはこのような江口氏の姿勢からうまれるのかもしれない。他にも頭や髪などの立体を張子のような面の集合体として描くことや、人物のポージングの考え方、人物のどこを基点として描き始めるか、立体的な線の見せ方など、多くを実演を踏まえて描画のテクニックが紹介が行われた。現代では江戸時代の浮世絵師になぞられた「絵師」とよばれるイラストレーターが注目を集めているが、デフォルメする表現スタイルではなく、人間の特徴・個性を絵に反映させる修練として「5分スケッチ」を続ける江口スタイルは、絵の重みが違う。

(文責：應矢泰紀)



イベント event

2-9：ゼイナ・アブラシェド×ヤマザキマリ対談

～オリエンタリズムとオクシデンタリズムを超えて：マンガの想像力～



開催日時：2017年11月5日（日）14:00～16:00

会場：京都国際マンガミュージアム 1階 多目的映像ホール

出演者：ゼイナ・アブラシェド（バンド・デシネ作家）

ヤマザキマリ（マンガ家）

参加者数：130名

主催：京都国際マンガミュージアム / 京都精華大学国際マンガ研究センター

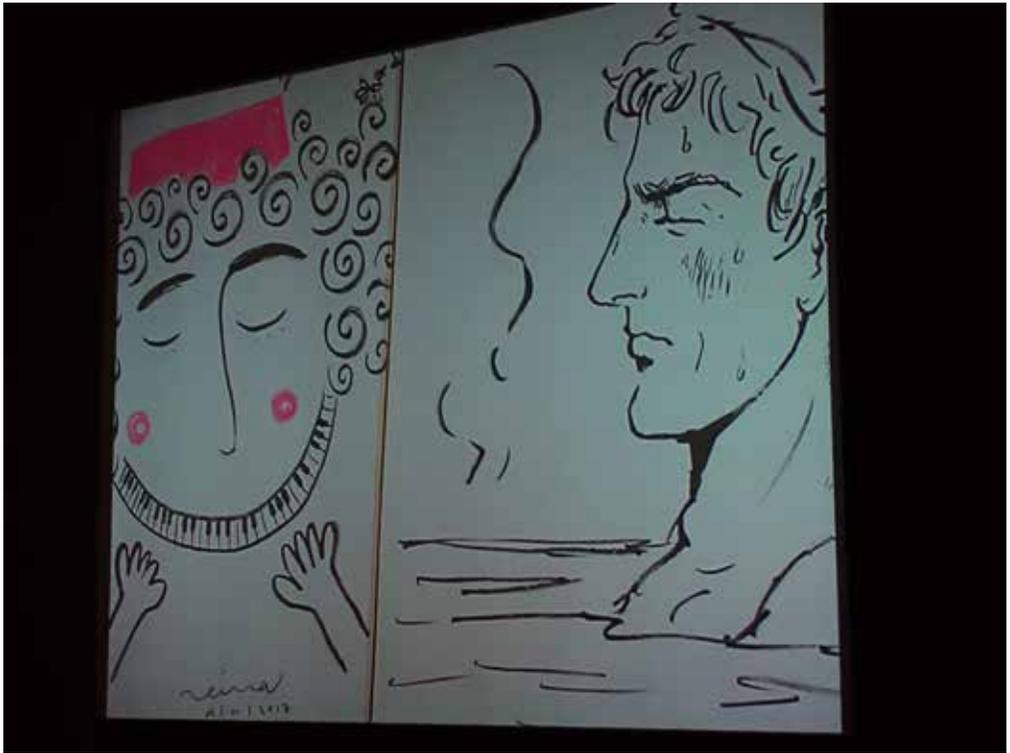
担当研究員：ユー・スギョン

イベント概要

アンスティチュ・フランセ関西－京都の主催する「バンド・デシネの週末 in 関西」のイベントとして、フランスのバンド・デシネ作家ゼイナ・アブラシェド氏と日本人マンガ家ヤマザキマリ氏を迎えたトークショーが行われた。レバノンのベイルートに生まれ、フランスとレバノンでアートを学んだバンド・デシネの作家アブラシェド氏。そして、イタリアで美術を学び、米国、シリアなどでの暮らしを経

て現在はイタリアに在住しながらマンガを描いており、「テルマエ・ロマエ」などの作品で知られるヤマザキ氏。本イベントでは、多様な文化に触れてきたお二人の経験を基に、作品制作にまつわる話や異文化から受けた影響など、幅広い話題について語ってもらった。

（文責：ユー・スギョン）



2-10：原画'（ダッシュ）の制作と活用



「World of Shojo manga」(イギリス)、2015年

■「原画'（ダッシュ）」について

「原画'（ダッシュ）」とは、コンピューターに原画を取り込んで色調整を重ねた上で印刷された、原画と並べても見分けのつかないほど精巧なマンガ原稿の複製である。退色しやすいデリケートなマンガ原稿の保存と公開を両立させるために開発され、マンガ家で京都精華大学教授の竹宮恵子をプロジェクトリーダーに、京都精華大学国際マンガ研究センターと京都国際マンガミュージアムが共同で研究を進めている。

■原画'（ダッシュ）制作

原画ダッシュプロジェクトでは、2001年以来、作家24名のおよそ約800点の「原画'（ダッシュ）」を制作してきた。最近の制作としては、2016年と17年にかけて、マンガ家のおおやちきと西谷祥子の原画ダッシュ、それぞれ13点と31点が新しく作られた。

■原画'（ダッシュ）の活用事例

2016～2017年度に開催された展覧会

原画ダッシュは、破損や紛失したら取り返しがつかない原画に替わって、国内だけでなく、フランス、ドイツ、オーストラリアなど、海外の展覧会にも積極的に出品されている。特に2017年度には、海外で原画ダッシュが紹介される機会が増え、計88点の原画ダッシュが、一年間3カ国、4つの都市でそれぞれ展示された。123,000人の来場者数を記録し、大成功となったオランダ・ライデンの「Cool Japan」展や、2018年以降の期間延長を決めたドイツ・アウグストゥスブルク城での「MANGAMANIA」展など、その多くが来場者からいい評価を得ており、今や原画ダッシュは日本のマンガ文化を広める一翼を担っている。なお、各展覧会の詳細については、「2-7：展覧会 原画'（ダッシュ）展示シリーズ 幻想と日常の間」および「2-13：その他 海外関連事業」を参照のこと。



「凛々しく可愛らしく」(東京・文房堂ギャラリー)、2014年

2-10
原画 - (ダッシュユ) の制作と活用



「幻想と日常の間」(京都国際マンガミュージアム)、2018年

2-11：江戸戯画・明治戯画・戯画本コレクションの活用



「青物魚軍勢大合戦之図」歌川広景 1859年

■ 「江戸戯画・明治戯画・戯画本コレクション」について

京都精華大学国際マンガ研究センターでは、現在（2018年2月時点）、江戸戯画222点、明治戯画38点、戯画本27点、合計310点を収蔵している。このコレクションは元々、マンガ研究家の清水勲氏が自身の研究活動のために収集したもので、氏の視点からマンガの歴史を辿る資料となっている。国内外の様々な展覧会に出展されており、今後はさらなるコレクションの拡充と国内外の展示活用が期待されている。

コレクションの活用事例

◆EDO GIGA COMICAL WOODBLOCK PRINTS FROM JAPAN

期間：2015年8月13日～9月1日〔前期〕、
10月13日～11月2日〔後期〕

会場：オーストラリア・シドニー
/ 国際交流基金アートギャラリー

内容：歌川国芳や歌川広重の作品など40点（前期と後期各20点）を出展。

◆江戸からたどる大マンガ史展

期間：2015年11月14日～2016年2月7日

会場：京都国際マンガミュージアム

内容：当コレクションを中心に、マンガの歴史を辿る資料約300点の展示。

◆江戸からたどる大マンガ史展 出張版

期間：2016年1月6日～1月12日

会場：京都伊勢丹 3階エスカレーターホール

内容：江戸戯画21点を出展。

◆江戸からたどるマンガの旅展

期間：2016年9月17日～11月16日

会場：千代田区立比谷図書文化会館

内容：「江戸からたどる大マンガ史」展の巡回。

◆MANGAMANIA展

期間：2017年4月13日～2018年2月28日

会場：ドイツ、Scholess Augustusburg
(アウグストゥスブルク城)

内容：江戸戯画より「青物魚軍勢大合戦之図」の画像データ提供。先方でパネル化と展示。



「浮世ハ夢だ夢だ」筆者不詳 慶応期



「心夢吉凶鏡」歌川芳藤 1860年

2-12：村上知彦コレクション整理事業

■「村上知彦コレクション」について

京都国際マンガミュージアムにおいて現在整理が進められている「村上知彦コレクション」（以下、村上コレクション）は、マンガ評論家・編集者として活躍されてきた村上知彦氏の所蔵する、マンガ文化を中心としながら領域横断的に広がる60年代以降の関西文化シーンが克明に記録された、膨大な一次資料群である。

村上コレクションにはマンガ史上において重要な役割を果たした60年代のマンガ誌『COM』の読者コミュニティ「ぐら・こん」の諸活動、70年代のミニコミ誌ブームのなかで発行された様々なミニコミ誌群および関連メディア、情報誌の草分け的存在『プレイガイドジャーナル』周辺のネットワーク、映画監督大森一樹らと展開した自主制作映画や上映会などの自主映画運動、そしてマンガにおける「ニューウェーブ」派の代表的雑誌『漫金超』とその前身となった「チャンネルゼロ」の活動など、多種多様な文化シーンに関する記録が含まれている。横断的なサブカルチャーの一次資料として、これだけのまとまった規模のものは希少であるという点において、その資料的価値はコミックマーケット代表であった故・米沢嘉博氏のマンガ同人誌をはじめとした収集資料群（現在は明治大学米沢嘉博記念図書館所蔵）と同様に高いものである。

■文化庁アーカイブ推進支援事業での整理作業について

京都精華大学国際マンガ研究センターでは2016年度より文化庁アーカイブ推進支援事業の援助を受けつつ、同コレクションの整理事業を進めてきた（「村上知彦コレクションに基づくサブカルチャー史アーカイブモデルの構築」）。この整理事業では、京都国際マンガミュージアムへの資料群の移送、そしてこうした文化シーンにまつわるいわば「雑多な」一次資料群のデータベース的な整理だけでなく、事業のもう一つの柱として村上知彦氏のオーラルヒストリー調査を実施し両者を結びつけることによって、各資料の文化シーンにおける位置関係や有機的なつながりを利用者が追うことのできる、物語性を有した新しいアーカイブモデルの構築を目指している。

次ページ以降では、そうした村上知彦氏への資料背景にまつわるインタビュー調査を一部抜粋・掲載する。2016年9月12日に実施されたこのインタビュー調査では、村上コレクション内の資料をもとにしつつ、村上知彦氏自身が編集者として深く関わったマンガ雑誌『漫金超』の創刊号について、その編集の背景と人的ネットワーク、そして70年代末～80年代初頭におけるマンガ史上の「ニューウェーブ」と呼ばれる動きとの関わりを中心に取り扱っている。

村上知彦コレクション整理作業記録

第2回インタビュー調査 抜粋（2016年9月12日 於 村上知彦氏宅）

インタビュアー：雑賀忠宏（京都精華大学国際マンガ研究センター）、日高利泰（京都大学）、伊藤遊（京都精華大学国際マンガ研究センター）

— 前は「ニューウェーブ概論」的な形で、村上先生の捉え方として「ニューウェーブは何だったのか」みたいなことをお聞きしたわけですが、その後ちょっと『漫金超』の編集ノートとかを見ながら、実際のその作られ方の体制について少しお伺いしたりしました。今回、ニューウェーブに関しては2回目ということで、もう少し個別の作家について詳しくお聞きしていきたいというのと、特に当時『漫金超』の編集とかで付き合いがあったとか、やりとりがあったような作家さんについては特に突っ込んでお聞きできたらなというところが中心になっています。その前に、前回のインタビュー後の雑談の時にちょっと出ました、『漫金超』の名前の由来についてお伺いしておきたいです。

村上知彦氏（以下、村上）『漫金超（まんがゴールドensーパーデラックス）』、とんでもない名前ですけども、もともとちょうどその頃70年代の終わり頃に青年誌が各誌分厚い豪華版雑誌みたいなもの、オールスター雑誌みたいなものを立ち上げた。『ビッグゴールド』が一番最初だったと思うんですけども。手塚治虫と白土三平とさいとう・たかをと石森章太郎、そのビッグネームをとにかく並べてその異色作みたいなものを売りにしたオールスターズ誌みたいな感じ。一方で『アクションデラックス』というのが同じような体裁だけでも、大友（克洋）さんとか……ちょっととんがった……同じようなスタイルで『カスタムコミック』もその流れやったんかな。もうちょっと劇画寄り、あちはつげ義春が目玉やったんかな。そういうスタイルの雑誌というのが出始めた頃だったので、その名前を全部くっつけて『ビッグゴールド』と『アクションデラックス』のデラックス、スーパーというのは特にどこからとかないんですけども、多分『漫画アクション』の増刊で『スーパーフィクション』もちょうどその頃出ていたかどうかという、ぎりぎりどっちやったかという感じかな。「まんがゴールドensーパーデラックス」という誌名がまず決まって、それを略称を『漫金超』にしようといったのはいいひさいちなんですけども、そういうのを全部くっつけるというのは、やっぱりマンガのある種全体像みたいなものを捉えるという。スーパーコラボ

レーション雑誌みたいな意味合い。そのいわゆる『ビッグゴールド』とは対極のオルタナティブなそういうものみたいな意味合いがイメージとしてはあるけど、多分そんなはっきり考えたわけではない。おもしろいからやったんですけども、そういう派手な名前にしたいという。そこで我々がくっつけたかったのは、少女マンガというのと青年マンガというのとエロマンガというのと同人誌というの。一方で『COM』とか『ガロ』とかの流れみたいなのが全部くっついたものというようなイメージだったと思いますね。

— この前見せていただいた編集ノートでも、例えば表紙を誰に描いてもらうかとかといったときに、ちばてつや先生の名前も出てきたりして、必ずしも若手ではない人たちの名前もかなり挙がっていたと思うんですけども、そのあたりの幅広さというかが『漫金超』の誌面の色って、編集に関わっている人たちの特に誰の色合いが強いかってあったんですか。

村上 いや特に誰の色合いが強いかということではなかったと思うんですけども、実際に編集に関わっていたのは僕とみねぜつと（峯正澄）と高宮成河の3人なんです。内容に関して編集会議をやったりしていたのは、それぞれが好きなことを言い合っていたんですけども、まあ感じとしては僕が少女マンガ家と、ガロ系というかちょっと実験的なもの、高宮成河というのは青年マンガとかあるいはSFマンガとかそういうような部分が中心で、みねぜつとの場合は、どっちかという同人誌系の、今の同人誌じゃなくなって、その頃のチャンネルゼロ、アズ、楽書館あたりの系列。今で言うと、コミティアっぽい意味での同人誌、創作同人誌の流れみたいなのは、わりとみねくんの意向とか趣味みたいなものが反映されていたりすると思います。そういう漠然とした役割分担みたいなのはあったような気がしますね。

— 漠然とした守備範囲といえますか。坂田靖子先生とかも5号から出てきてますけど、あるいは村上先生からあげたのかなと思いついてるんですけど。

村上 あと前回はちらっと言ったけれども、関大漫画同

好会の後輩で事務をやってもらっていたSさんが、ラヴリの同人で連絡がつけられたというもあります。

— 前回の話だと、原稿がとれた作家さんの作品を載せていたから、実質的には集まった作品でできていくというところはあるんですね。

村上 そうですね。だから毎号の作家でのバランスとかあんまり考えてないわけです。ただ、前回誰を載せたから次は誰にしたいみたいな順番とか流れみたいなのはあったけども、1冊全体での構成を考えたということではないですね。1冊の中での。関西系の人たちというのはわりあいレギュラー、準レギュラーみたいな感じで繰り返し登場してくると、あと1回こっきりの人と。2回登場しているのはやまだ紫さんと高橋葉介さんぐらいかな。カットとかは別にして、作品で2回描いてもらってるのはね。そういうふうには5号ぐらいになると2回登場したりする人も関西系以外でも出てくるみたいな感じでしたね。頼んでいて、5号までにもらえなかった人とか、頼んだけど断られた人とか、断られたというかちょっと待ってくれと言われて、それっきりの人とかいますけども。

— 頼んでいて、ちょっと待ってと言われていたのは具体的には？

村上 一番はっきりとそう言われたのは柴門ふみかな。

— 忙しくて。

村上 そうそう、話は早くからしていたんだけどちょっと忙しくなってきて。ちょっとすぐにはできないという。

— じゃあ作品が集まってから、ある程度じゃあどういう順番にしようとか。

村上 そうね。順番とかは、その号で依頼する作家が決まってから決めていたと思いますね。

— そうした形で結構バラエティに飛んだ作家陣が出てきているわけですが、『漫金超』自体は特に自身がニューウェーブという言葉を使っていないという紙面構成になってますよね。そこで出てくる作家の特にニューウェーブに近い作家さんについて、当時のニューウェーブという枠組みが特に編集者、

評論家の側で作られていった時に、それにどれぐらい結びつけ、近い距離で村上さんが見ていたとか、その作家をどういうふうにつまっていたかというのをちょっと個別に聞いていけたらと思います。とりあえず1号の面々からですけど。

村上 1号の場合はわりあい早くに決まっていたと、だから大友克洋、高野文子、さべあのみ、いしいひさいち、ひさうちみちお、川崎ゆきおあたりでいこうというのはごく初期の段階で決まっていたので、あんまり検討してどうのこうのというのはなかった。赤星ジュンというのが入っていますが、これは前にもちらっと言ったかと思うんですけども、宮西計三が本来の目次だったんですが、落ちまして、かなり間際の段階で急遽入れた作品です。ページ数が全然あってなかったの、前後編にむりやりわけて、2回掲載になってしまったというものなんですけれども。だから創刊号に関してはわりあい早くからラインが決まって、そういう意味では大友さん、高野さん、さべあさんみたいな意味でニューウェーブっぽいラインナップというのが最初から想定されていたという感じではあると思います。あとどういうふうに一人ずつの作家それぞれの評価をしていたか、ですね。大友さんというのは、誰が推したというよりは共通の理解として、やっぱり大友さんは外されへんやろなという。できたら真っ先に頼みたいみたいな感じではあった。西部劇を頼もうというのは、確か高宮のアイデアだったと思うんですけども。ただ、実際には『コミックアゲイン』の編集をしていた、大山金太氏がいつべん西部劇を頼んでいるというような証言が後にどっかに出ていて、こっちはそれは知らずに頼んだんだと思うんですけど、向こうの方が早かったと言っています。大友さんは別にそんなふうには言ってなくて、おもしろいですねと言ってわりとすんなり引き受けてそれでもらえたと思いますね。西部劇を頼みたいと思ったのは、大友さんの作品自体がちょうどその頃長編に傾きかけていた頃だった。我々というか、僕と高宮の間で好評だったのは、「信長戦記」というやつとか、あともうあれかな。「Fire-ball」はもう出ていたかな。

— 出ていた感じですね。

村上 出てますね。「Fire-ball」とかその辺のがちらちらと出てきて、まあ時代劇というか、「信長戦記」の場合は時代劇ではないけどもああいうものとか、それからSFとか戦争ものとかあるけれども、やっ

ぱり描いてないので描いてほしいのは西部劇だろうという。大友克洋の描く西部劇が見たいというのがそういうふうに関心した動機ですよね。これも前にも言ったけれども、当時ちょうど大友さんがいしいひさいちに会いにチャンネルゼロへ遊びに来られたんで、ちょっと調べてみたんですよ。79年の手帳とダイアリーがありまして、6月の23日にチャンネルゼロで会議をやっている。これが『漫金超』の2回目の会議やと思うんですけどね。79年の6月ぐらいから新雑誌の会議というのが6月3日に出てきて、13日のこれも多分そうやと思う。そこへ大友克洋が23日に来たというふう書いてあるので、来た時に頼んでますね。そやから多分。

— そうでしょうね。

村上 うん。

— じゃあもうそれより以前に、「大友さんは絶対」みたいに決まっていたということですね。

村上 そうですね。多分その辺の主な頼みたい作家のリストアップは既に終わっている段階だったと思いますね。その頃。

— 大友さんは満場一致作家なわけですね。

村上 うん。この辺で既に新田たつおに頼んだりしています。かなり早い段階で。まあだから連絡のつくところから順番にやっていた感じですね。高野さんは、迷宮の方から連絡先を教えてもらって、8月ですね。8月の7日に高田馬場のビッグボックスの喫茶店で会って依頼していますね。

— すごい手帳ですね。

村上 東京にいて、でもこの時は、まだスポニチに勤めていますから、なんか会社の出張で行ったついでに。あ、違う、夏休みや。4、5、6、7と夏休みをとって、文芸坐でオールナイトを見て『コミックアゲイン』の中原研一さん……大山金太と（編集長の）鈴木清澄さんにも会っていますね。あと、ひばりヶ丘へ行って宮西計三に依頼していますね。あとさべあのまにもこの時に会って依頼している。飯田耕一郎にも会っている。井上英樹にも会っていますね。高野文子にも会って8月の段階で依頼はしています。

— この間仰っていた、「みんな集めていっぺんに説明した」というのはいつですか？

村上 それは12月ですね。

— それぞれに1回、依頼は打診しておいてということですね。

村上 そういう依頼とかは個別にやって、受けてくれた人を集めて。

— 高野さんに関しても、その楽書館つながりですか？

村上 はい。それと迷宮とです。

— 楽書館自体とはそのチャンネルゼロ工房の頃から？

村上 楽書館の水野流転さんとは仲良かったんで、紹介してもらって。さべあさんはその前からチャンネルゼロ工房の同人誌の『チャンネルゼロ』に原稿描いてもらったり、表紙描いてもらったりしていますので、同人誌としてのつながりがあったということです。タイミングで言えば高野さんあたりはもう『JUNE』とか『アゲイン』とか『Peke』とかに登場していたと。さべあさんもそうですね。それから高野さん、さべあさんというのは、同人誌からそういう新しい雑誌に登場してきた、ちょっと象徴的な作家だったということで、さべあさんなんかの場合は既に迷宮は同人誌レベルでの単行本出したりしていましたし。

— 当時のそういう同人誌をウオッチしている熱心なマンガファンたちの間でどう捉えられていたのでしょうか？

村上 同人誌をウオッチしているマンガファンというのが当時あんまりいなかった。いても全部知り合いという感じやと思うんです。多分。ただそういうのが雑誌レベルでマイナーな雑誌とはいえ登場してきた、同人誌レベルでの人気というのが可視化されてくるみたいな状況ではあったと思うんで、そういう意味で新しいタイプのデビューの仕方をする作家とか、作品としても同人誌でありながら商業誌に載って遜色ないというか、また違う読者に注目されるようなポジションというのを切り開いていくような人というのが見えてきて、それと例えば大友さんをくっつけるのがおもしろいというふうに僕は思った。

それが一緒に載っている雑誌みたいなのをイメージしたいと。

— 大友さんと、例えば高野さんなんかはもう交流があったりしたんですか。

村上 すれすれ。この頃から始まっているんじゃないかな。やっぱり。大友さん自体がそんなにどこにでもひょこひょこ出て行く感じではなかったと思うから。ただやっぱり『漫金超』だけじゃなしに、そういう『コミックアゲイン』とか、『奇想天外』とかいう雑誌とか。あと前回も話したけど、綺譚社という早稲田のミステリークラブ出身の連中が作ったあれはもう完全に趣味の同人誌。マンガ同人誌じゃなくて趣味雑誌みたいな形なんですけども、そこが編集プロダクションみたいな形で大友さんの本を出したり、また高野さんもそこでアルバイトしたりしていたんで、そっちの方から大友さんと高野さんにつながりというか。多分、綺譚社経由が一番大きいと思いますね。

— 『ばふ』の大友克洋特集やさべあの特集をここに持って来ましたが、確かどちらも高野文子さんが書いてらしたような気がします。

村上 さべあさんと高野さんはもう楽書館の頃から。当時は同人誌の即売会とか、今と比べたらこじんまりしていて。もちろん即売会とかでいつも顔を合わせると。コミケもそうだけど、楽書館の集会とかで会ってたんじゃないかな。

— 特集の最後に高野さんがさべあさんのことを書いている。大友特集にもそういうのがありますね。大友先生にはさっき西部劇を描いてもらいたいみたいな形で依頼したという話でしたけれども。高野先生とかさべあ先生とかは？

村上 ページ数だけ相談して、どれぐらいがいいですかという。その二人には、どういうものをという話は一切しなかったと思いますね。

— 『漫金超』全体を通じてそういう感じだったんですか。

村上 大友さんに西部劇を注文したのがめずらしいぐらいでしょうね。基本おまかせという感じです。高野さん、さべあさんあたりはとにかく描いてほしい。とにかく創刊号に2人をそろえるという感じでした。

— その点も満場一致だったんですね。それ以外の関西勢の方々は？

村上 関西勢はひさうち(みちお)さん、川崎(ゆきお)さん、雑賀(陽平)さん。いしいひさいちはもう固定で毎回頼もうという感じでしたね。雑賀陽平さんというのは『COM』でデビューした作家でその後『週刊朝日』とかに描いたりはしていたんですけども、あんまりプロとしては活動してなくて、でもチャンネルゼロが同人誌でずっと原稿頼んでいて、同人誌から引き続きという形。ひさうちさん、川崎さんに関してはもう既に関西でカルト的な人気も2人もありましたので、これは外せないということだったです。

いしいひさいちは、もちろんいしいひさいちに(雑誌の)顔になってもらわないと困るので、ちょっと長めのものを毎回頼むという。できるだけ4コマじゃないものを。

— いしいひさいち先生には、漫金超出張版とか、あるいは『ばふ』で同人誌特集された時の2ページの漫金超広告とか他にもいろいろ書いてもらっていますね。

村上 そうですね。広告塔になってもらうというののひとつの方針でしたから。そういう形でいろいろあちこちに出張してもらって、『漫金超』の宣伝をしましょうという。だから創刊号が出るまでにいしいひさいちの場合はそういう予告マンガで、『大快楽』と『エロジェニカ』に交互に載る広告マンガとか、あとさっき言っていた『ばふ』に載っていた漫金超劇場とか。いや、漫金超劇場は『大快楽』とかのだ。それが派生して『ばふ』で『元気なき戦い』の第一部になっていったんですけど。しつこく予告ばかり出て本誌がいつまで経っても出ないという、逆に話題になった。だから本当は1月創刊のつもりで年末ぐらいからそういう予告をやりだしたのだけど、延々と半年ぐらいそれで引っ張ったという。

— 宮西計三先生の代原みたいな形で入ってきた、赤星ジュン先生とはどういうつながりですか？

村上 彼女も同人誌のチャンネルゼロで描いてもらっていた作家で、僕は直接にはあんまり知らなかったんです。だからみね君からのオファーというか、たまたま預かってあったのを、代わりにこれ載せたらということだったかな。彼女自身はこの後上京して山田双葉、のちの山田詠美と一緒に、福生かどっか

で黒人と一緒に暮らしていました。

— のちに映画になったようなお話でしょうか。

村上 山田詠美の『ベッドタイムアイズ』と同じようなことをやっていました。このマンガもそういう感じのマンガなんですけれども。そういう意味ではわりと同人誌で書いていたけども、プロ志向のある人やったんやと思いますね。長めのものが書きたいということで。ただ、そういう意味では当初の予定には全くなかった……。

— 『漫金超』の特色は、雑賀陽平さんが載っていたりとか、いしいさんが載っていたりみたいな関西勢が載っているということもあるような気がするんですけども、それはかなり意識されているんですね。

村上 意識していたと言えば意識していたんですけども、要するに我々が作る以上必然的にそうならざるを得ないだろう、それを外すとかえっておかしいという。『漫金超』の特徴というのはもうひとつ、読み物ページだと思っているんですけども、やっぱり読み物ページの部分というのは同人誌のチャンネルゼロから引き継いだみねぜっと、峯正澄の個性みたいなのがここに一番現れている。「ルナー協会」という変なページのコラムとかは僕もわりと書いているんですけども、そのセンスでコラムとかも漫画雑誌らしくないものにしたという。漫画雑誌っぽさを残しつつ、なんでこんなものが載っているんねんという感じのものをなるべく載せたいなというところがあって、それと『漫金超』のニューウェーブっぽさをつなぐものとして、関西の作家にはレギュラーで毎回描いてもらおうというのが多分あったんだと思う。それが川崎さんとかひさうちさんとか雑賀さんとかが載っていることでうまく混ざり合うんじゃないかという感じですね。

— そういったある種の編集方針みたいなのは、最後まですぐぶれることもなくということですか。

村上 そうですね。だからそれを意識して、「ああ、これではいかんから変えよう」と思ったというのはないですね。なんとなくずれていった部分があるかもしれないけど。だから『コミックアゲイン』なんかは『Peke』から『コミックアゲイン』に変わった時に、『COM』というのをものすごく打ち出して、『COM』の作家たちを前面に出すのプラス、

さべあさんなんかを起用するという形でいったのが、『漫金超』はその中心に『COM』を置くというのはしたくなかったという。でも雑賀陽平を載せてたりやまだ紫を載せてたりすることで、ちょっと『COM』からの流れというのもちゃんと押さえておきたい。あと坂口尚さんと。というのはあったんですけども、あんまりそれがはっきり言える形はとらないようにしようと思ってましたね。

— なるほど。

村上 『ガロ』系の人が多いというのもあるんですけども。それもあんまり『ガロ』だからという感じに見えないようにしたいなと。というのはむちゃくちゃ多いんです、その読み物のページとか見ると。南伸坊さんとか。

— そうですね。

(抜粋)



2-13：海外での事業展開

◆ COMIKON-ISTANBUL

期間：2017年10月7日～8日

場所：トルコ・イスタンブール

主催：COMIKON-ISTANBUL Manga Fest 実行委員会
/ イスタンブール芸文館

内容：日本国際マンガ研究センターが制作したマンガ史の年表やマンガ雑誌・本などを展示。

◆ 「Manga Pioneers」展

期間：2016年4月15日～4月17日

会場：ギリシャ・アテネ、Hellenic American Union
(ヘレニック・アメリカン大学)

主催：Comicdom Con Athens / 京都国際マンガミュージアム
/ 京都精華大学国際マンガ研究センター

内容：「マンガの先駆者」というテーマで、マンガ家平田弘史と水野英子の原画' (ダッシュ) 15点ずつ (計30点) を展示。

◆ 「MANGAMANIA」展

期間：2017年4月13日～2018年2月28日

会場：ドイツ、Scholess Augustusburg
(アウグストゥスブルク城)

主催：Scholess Augustusburg (アウグストゥスブルク城)
内容：日本とドイツにおけるマンガ文化の発展に関連した展覧会。江戸時代の浮世絵、マンガの歴史やマンガ作品などを紹介。マンガコーナーの一部として、わたなべまさこ先生の原画' (ダッシュ) 10点を用い、「Beauty and Fashion」というテーマで展示・紹介。マンガ年表や、江戸戯画の複製画も展示協力した。

◆ 「Cool Japan」展

期間：2017年4月14日～10月29日

会場：オランダ・ライデン市、
Museum Volkenkunde (国立民族博物館)

主催：Museum Volkenkunde (国立民族博物館)

内容：江戸時代から現代までの日本の大衆文化を紹介するため企画された展覧会。原画' (ダッシュ) コレクションからは、松本かつぢ、竹宮恵子、高橋真琴、花郁悠紀子の原画' (ダッシュ) 4点を展覧。

◆ 「COMICS! MANGAS! GRAPHIC NOVELS!」展

期間：2017年5月7日～9月20日

会場：ドイツ・ボン、Bundeskunsthalle (ドイツ連邦美術館)

主催：Bundeskunsthalle (ドイツ連邦美術館)

内容：1800平米の展覧会会場に欧米や日本のマンガ原画350点を含む資料を展示した展覧会。ドイツで開催されたコミック・マンガ関連の展覧会の中では最大規模。原画' (ダッシュ) コレクションからは竹宮恵子の原画' (ダッシュ) 4点を展覧。

◆ 「謎だらけの少女マンガ」展

期間：2017年9月1日～11月1日

会場：デンマーク・ヴィボー、
Viborg Museum (ヴィボー・ミュージアム)

主催：VAF (Viborg Animation Festival)

/ 京都国際マンガミュージアム

/ 京都精華大学国際マンガ研究センター

内容：「少女マンガって、何?」、「少女マンガの作家は女性だけ?」など、よくありがちな少女マンガに関する7つの質問について、原画' (ダッシュ) を用いて説明する展覧会。あすなひろし、上田としこ、花郁悠紀子、高橋真琴、竹宮恵子、ちばてつや、藤井千秋、牧美也子、水野英子、わたなべまさこ、上原きみ子、北島洋子の原画' (ダッシュ) 70点を展覧。関連イベントとしては、原画' (ダッシュ) プロジェクターのリーダーで、出展作家の一人でもある竹宮恵子のレクチャーや、マンガ制作ワークショップなどを開催した。



デンマーク・ヴィボーで開催された「謎だらけの少女マンガ展」会場風景。